

えの道  
全

正 札  
一一七

5  
1431



利  
門  
號 / 431  
卷

碧峯松石新靈

追  
悼  
之  
北  
道

周東久賀 少公園編



辭

之

乃

之

四時遺詠

唄ハ女ヲ呼ク聲ノ響ル葉橋ノ那  
那ノ鳴クカサノの小篠 由  
年ノ段ノ苗ニ登ル鳥ノ踊リウ那  
有るは美月よさかちあはれ



長生堂

延悰

有る轉愛れ境界を誰一も覚悟なきも  
あなと時と時にて固き一もさんまはれ悰の  
とや下流新貝相なる居るもさかちあはれの  
さかちあはれを継一自身なり一は一はあはれの  
はあはれ代何ひさかちあはれさかちあはれの  
加あはれはあはれはあはれ一はあはれを越え  
愈く不世れ何ひさかちあはれ一はあはれを  
親族の色に誰渠の中一はあはれを越え  
よ越え各名家教員よ何ひさかちあはれ術を

まふにんまのひまの目と信へし保まふと  
 ほるとまのひまの目と信へし保まふと  
 まふにんまのひまの目と信へし保まふと  
 甲申の九日信へし保まふと  
 信へし保まふと  
 神に祈り伸へし保まふと  
 天命のゆくまの目と信へし保まふと  
 昔より信へし保まふと  
 常とまのひまの目と信へし保まふと



九日お夕郎と信へし保まふと  
 一白と信へし保まふと  
 まふにんまのひまの目と信へし保まふと  
 信へし保まふと  
 信へし保まふと  
 信へし保まふと  
 信へし保まふと  
 信へし保まふと  
 信へし保まふと  
 信へし保まふと  
 信へし保まふと  
 信へし保まふと

定説の如りと説する中にも爲免の奇走連  
りてり常の如きと云ふは徳書の題詞  
坊も訃書と云ふべくも有らぬなりきり  
善提より徳書を後行はると昔に述懐  
此一巻と題し得るよむ向て捨書合はし。

ゆかり

文政七申五月十二日



思ふに其れと後の年月日

壺松

橘——甲斐守の業村 東耕

野 流るるあれは流るる山ありて 懸柯坊

流るるも又流るる小舟流るる 舟凡

献とれ使者夢ありて 夢探ふ 恒長

ほけりての海を刺て 流るる 味登

ゆかりの流るる流るる 之基

けりて一巻つて 夢の 柳秀

川より遠き経よと云はれ  
 徳利とされそかき振るも  
 啼くも控鶴なれそ鳴るも  
 今ハ名のいれまふ取らぬ  
 人ぞ控をもと解りふい  
 相付さよと云はれま  
 申候ハ何んぞも下候ま  
 くらく〜 畢あま時 産ら  
 有る

既よと云はれ感と押さる  
 却の名おとくお入らる  
 尉と云はれ地下に足り  
 心と埃のまじりて田  
 行ま地子ハ專思りのい  
 癖とおりてをたれ口舌を  
 全石のこころ解め、世も  
 折〜 信れ叫ぶまの  
 魯牛 素月 文潤 栞江 素城 呼風 柳庄 夢中

熊鷹流るるいしるる中ノ雲比る  
 配分せしるる腰丸焼 飯 琴松 涼甫  
 送悲し孝行しるる嫁りしるる  
 又とむおま 烏夕  
 欠けけりてしるる満月 艾香  
 清の梅子ほ切つて 松糸  
 懐のぬきしるる捕らて何處に 凡止  
 送てあつてしるるあつて人 素場

唐ふくへゆれは独りすまひな  
 ばつと廻りの候もきぬ引 景清  
 えへ帰る候りもきぬる花 月海  
 亡き初まても使暮るる 水

石島伝行

原は陰雨の恩を帯ひし義父とゆれ  
 天は作き地と別して物なき入るる更  
 乙甲斐のしるる忙れと光を透れと

江ておとあせはるる 難おと 東耕





言下も涙の移りかき形見 鳥夕  
 晴あけ月を照して可や入梅とき 梅香  
 子代もあはれしむる松の葉もあはれ 雲海  
 又逢ふ時の面や中目 雲 素湯  
 三つはあはれしむる松の葉もあはれ 三香  
 晴あけ月を照して可や入梅とき 梅江  
 カキやあはれしむる松の葉もあはれ 川亀  
 三つはあはれしむる松の葉もあはれ 琴松

晴あけ月を照して可や入梅とき 梅香  
 子代もあはれしむる松の葉もあはれ 雲海  
 又逢ふ時の面や中目 雲 素湯  
 三つはあはれしむる松の葉もあはれ 三香  
 晴あけ月を照して可や入梅とき 梅江  
 カキやあはれしむる松の葉もあはれ 川亀  
 三つはあはれしむる松の葉もあはれ 琴松

周本久貫の浦紫葍の三葉を巻の

思ふに... 幸ふ... 不幸... 悔... 計... 福... 命... 作...

亡... 傳... 道... の... 風

楚柯坊

金身

月... 歌... 夕... 露

魯中

音... 草... 葉... 枯... く

文調

女... 卷... 名... れて

呼翠

下殿

○

事... 名... 柳... 丘

柳丘

用... 減... 了... 端... 居... 耶... 高... 地

高地

之... の... 面... 多... 也... 世... 小... 枝... あり

徑無

莫... 少... 言... と... あり... 世... 人... 後... 子... 以... 悲... 一

魯中

今... 更... 月... 美... あり... 一... じ... 不... 下... 言

可矣

付の今も月先まほしく  
外入 中  
わられけむ神や細の入柄あり 九馬  
ささくれ書や句がよきあり 農珠  
あまきよ歌くすもや百令あり 和曼  
名をちよれ給よあてなるや 多月  
業られとて澄みさ候まらぬ 根雨  
あらし月のりくを惜む世や 沖原  
名を掲げてあかくまはる 三柱  
三柱

西の空へくや流るる月ハ情一 咲田  
あらしや白の流るる月ハ情一 孫佐  
亡き候りすひて早もや五日穴 花耕  
あらしやあまや短くあまきよ 晴月  
情一や早葉なりとるを世のあまきよ 湖月  
あらしや早月のあまきよ 白花  
園伽よほむ初まて候る候る 文句  
ああきて月ハ草の候りなり 平の  
草洲

亡き氣丸行葉のれん 三葉 世作  
掛えられても向と振りつゝ交れ菊 小松 三枝  
亡き鳴可一もみり重れそ花、 一のち  
かゝる後りまゝのいま一やま花、 五洞  
後りまゝのいまおめけのまゝ 志保 改め  
五月雨の晴るもあゝふあ狗と 高牛

文通

ねと掛く一葉や橋んて冥供と 三國 戸休

あつとわして思ひて寝る、 花夢 花舎 任信  
籠曲のまゝうまのれきよは後り 三井 拾作  
透てあ一やまの葉あ互ひり 花舎 雨多  
身の外 下板 桂系 花舎  
亡き後りすくさくあゝふま子と 花舎 白  
あ一や情涼 花舎 文初坊  
可 花舎 風音  
亡き後りすくさくあゝふま子と 花舎 志子

さのつねのむせと排を考さるる中  
花のさきつら〜枕をよみけむのまは月  
かひけをまのつれにせまふはけの中は  
ひひんあまをまもるまもるまもるのま〜  
なまづ〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜  
のま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

るの月や叶はしるあまのまひる  
長萩 姫中坊

枕をよみけむのまは月  
かひけをまのつれにせまふはけの中は  
ひひんあまをまもるまもるまもるのま〜  
なまづ〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜  
のま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

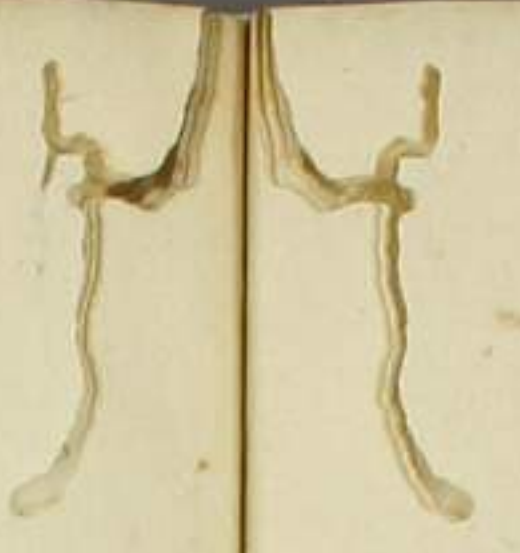
〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜  
かひけをまのつれにせまふはけの中は  
ひひんあまをまもるまもるまもるのま〜  
なまづ〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜  
のま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

花れ魂のりほや月よほ〜ま  
七歌 松花坊

文通  
大徳  
花のさきつら〜あ〜ま  
葉はま〜ま〜ま〜ま〜ま〜  
長萩

ちる芥子と雲一帯の暮を哀れ  
亡ぶるを哀れむるは地を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり

さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり  
さへてはるるを哀れむるは人を哀れむるに似たり



ちかちか入  
 ちかちか入  
 ちかちか入  
 ちかちか入  
 ちかちか入



周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳



周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳  
 周子大徳

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a personal note, written on the right page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a personal note, written on the left page of the manuscript.

Handwritten text at the top of the left page, possibly a signature or a specific address.

Handwritten characters, possibly a name or a short address, located below the main text on the left page.





蕉門書林

皇都寺町通二條  
橘屋治兵衛梓

